

第20回ホームカミングデー 約3800人が恩師、友人らと旧交温める

卒業生の「祭典」——第20回ホームカミングデーが10月25日、多摩キャンパスで開かれた。この日は、肌寒い雨模様のあいにくの天気になったが、約3800人が参加、懐かしい友人や恩師と再会して旧交を温めるとともに、トークショーや各種イベント、それに豪華景品があたる福引抽選会などで、楽しいひと時を過ごした。

午前10時から9号館（クレセントホール）ではじまった開会式では、まず出席者全員で校歌を斉唱。このあと、久野修慈理事長が立って、「みなさま卒業生が心通わせていただき20年を迎えることができました。心から感謝申し上げます」とお礼の挨拶。

続いて永井和之総長・学長が、「ホームカミングデーは誕生日のようなもの。

6組の親子三代の中大卒業者を表彰

開会式では、最後に恒例の親子三代卒業者の表彰が行われ、6組に対し、久野理事長から表彰状と記念品が手渡された。

☆祖父、夫婦、子供の

家族全員が中大☆

児玉源太郎さん（昭和29年法学部

卒）と娘の内野知佐子さん（昭和59年法学部卒）、それに内野さんの長男、正俊さん（経済学部2年）の親子3代は、3人揃って今回の表彰式に出

実家（母校）に戻られた皆さんを心から歓迎します。創立125周年を迎える来年は、ぜひ家族連れで来ていただきたい」と歓迎の挨拶をした。

次に南甲倶楽部会長の足立直樹・出版印刷社長が祝辞に立ち、「社会に散っている同窓の仲間こそが人生の知恵袋、財産となる」などと述べ、祝意を表した。

このあと来賓として出席していた千葉景子法務大臣（昭和46年法学部卒）が、司会者に突然指名されて挨拶。会場から「頑張れよ」の声援を受けた千葉法相は、「私の原点は中央大学で学んだこと。質実剛健の校風が私の精神になっています」と述べたうえで、「中央大学がますます発展するようにしっかりと尽くしていきたい」と述べ、支援を約した。

席した。

源太郎さんは、学生時代を駿河台で過ごしたため、「キャンパスが多摩に移ってしまい非常に残念です」と嘆く。だが、その一方で、「若い

人には、この多摩キャンパスが中央大学。ますます発展してほしい」と母校の発展を祈念する。

新しくできたばかりの多摩キャン

パスに入学したのは、知佐子さん。

「父の勧めで自然と中大へ進学しました」という。当時の真新しい多摩キャンパスは、「塗装が真っ白だったためか、光が校舎に反射してサングラスが欲しいほど眩しかった」と懐かしそうに入学当時は振り返る。

正俊さんが高校へ進学する際、知佐子さんは杉並や小金井の附属高校

の存在は知っていたが、後樂園の中
央大学高校の存在を知らなかった。
ところが、正俊さんが中央大学高校

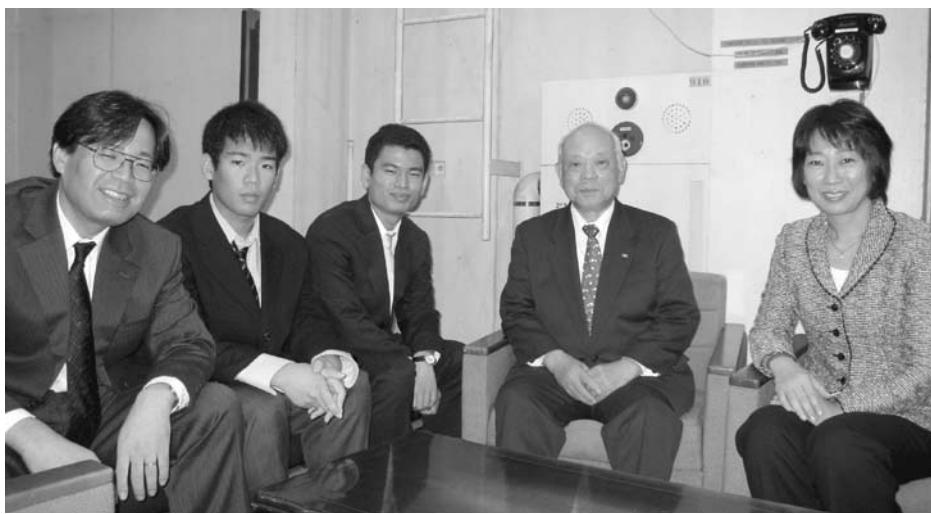
を自分で調べ、行きたいと希望した。
「中央のことはよく分かっているか
ら、安心して行かせることができま
した」と知佐子さんは
笑顔で語る。

話を伺っていくと、
児玉さん一家は、「筋
金入り」の「中大一家」
であることが分かって
きた。知佐子さんのご
主人、正博さんもまた、
中法学部を卒業した。

二人は学生時代と同じ
ゼミに所属しており、
そこで知り合ったそう
だ。

さらに正俊さんの弟
の俊郎さんも、現在、
中央大学高校1年生。
つまり、家族全員が過
去にあるいは現在、中
央大学や附属高校で学
ぶ一家だったのだ。

俊郎さんは、高校受



児玉さん家族。左から内野正博さん、俊郎さん、正俊さん、源太郎さん、知佐子さん

験の際、「落ちたら自分だけが中大
の関係者ではなくなるので、大きな
プレッシャーを感じた」という。そ
れでも中大高校へ行くことは自分自
身で決めた。お祖父さんや両親、兄
の背中を見て、中大の良さを感じて
きたからなのかもしれない。(石川)

☆三代が駿河台、多摩、 後樂園で学ぶ☆

山北博司さん（昭和30年法
学部卒、故人）、晴雄さん（昭
和55年商学部卒）、智也さん
（理工学部1年）の親子三代は、
駿河台、多摩、後樂園の3つ
のキャンパスでそれぞれ学ん
だファミリーだ。一代目の博
司さんは駿河台で過ごし、二
代目の晴雄さんは駿河台と多
摩の二つのキャンパスで学ん
だ。三代目の智也さんは、現
在、後樂園キャンパスで学ん
でいる。

親子三代に渡って中央大



山北晴雄さん（右）と智也さん

学に通うようになったことについて、
晴雄さんからは意外にも「たまたま
です」という返事がかえってきた。
晴雄さん、智也さんとも、合格し
た大学の中から行きたい大学を選ぶ
段階になって初めて、親が卒業した
中央大学を意識したという。晴雄さ
んは「会計士になりたい」、智也さ
んは「理工学部へ行きたい」という
思いが先にあり、結果的に中央大学

へ進学したという具合だ。

通学先のキャンパスが違ったためか、普段はあまり中央大学に関する共通の話はでないという。しかし、「正月の箱根駅伝は、親子で一緒にあって同じ大学を応援できるので大きな楽しみ」と晴雄さんは嬉しそうに語る。

四代、五代と中大出身が続くと思うか尋ねると、「本人が最終的に中大に行くことを望むのであれば、大歓迎だ」と自主性を重んじる山北さん親子の姿勢が、とても清々しく思えた。

(石川)

☆祖父と両親が卒業した 中大に編入☆

小室東一さん(昭和15年法学部卒、故人)と娘の関根博子さん(昭和45年法学部卒)、亜希子さん(平成16年経済学部卒)のファミリーは、亜希子さんが短大から中大に編入したことで、親子三代そろって中大卒になった。



関根博子さん(左)と亜希子さん

学から中央大学3年に編入した。関根さん親子は多摩に住んでおり、自宅から近く、両親が卒業した大学ということもあり、中央大学への編入を決めたという。実は博子さんは、ご主人と所属していた研究室で出会い、結婚した。つまり関根家はそろって中央大学卒ということになる。

亜希子さんは、「編入してからゼミに所属し、勉強に励みました。ゼミの仲間とは今でも連絡を取り合っていて仲がいいです。自然に囲まれた環境で、充実したキャンパスライフをおくることができました」と懐かしそう。

亜希子さんに四代目はどうなるかと尋ねると、「まだわからないけれど、いい思い出がたくさんあるので(子供ができたら)中央大学の話はたくさんしたいと思います」と答えてくれた。

(伊藤)

☆『質実剛健』の校風に 魅かれる親子☆

及川安寿さん(昭和24年専門部法学科卒、故人)、雅晴さん(昭和52年経済学部卒)、晃平さん(商学部1年)は、中央大学の校風の「質実剛健」に魅かれた親子三代だ。

雅晴さんは、父の安寿さんの影響もあって中央大学附属高校に進学し、中央大学に入学した。学生時代はラグビーサークルに所属し、熱い青春を過ごした。

「学生時代は正直、真面目に授業を受けた記憶があまりありません。キャンパスでの思い出よりもラグビーサークルの練習場での思い出のほうが多いですね。練習後にみんな飲みに行ったり、遊んだりした思い出のほうが多いです」と昔を懐かしむ。「当時の仲間とは現在でも付き合いがあり、一生の友人になっている」という。

今春、中央大学に入学した晃平さ



及川雅晴さん（左）と梶平さん

所だと思つています」と梶平さん。そして、「質実剛健という中央大学の雰囲気は自分にはとても合っていると感じました」と中大の校風を魅力にあげた。

『質実剛健』に関しては、雅晴さんにも思うことがあるようだ。「息子もそうですが、質実剛健をもっと伝えてほしい。質実剛健というのは日本人の魂を体現しており、日本人の心にフィットしているものです」と力を込めた。

（伊藤）

☆父親からの勧めで 伝承された三代☆

平野保明さん（昭和18年専門部法

学科卒、故人）と徹さん（昭和47年法学部卒）、智子さん（平成18年専門職大学院国際会計研究科卒）の親子三代は、父親から娘への勧めがあった。



平野徹さん（左）と智子さん

二代目徹さんは、中大附属高校から中大に進学。中大を選んだのは、一代目の父、保明さんの出身校だったからだ。三代目、智さんは日大理工学部で学んだが、会計に興味があり、大学院進学を考えたときに、父、徹さんに勧められて中大を選んだ。

「在学中はよく大学の話をした」と智子さん。大学院は市ヶ谷キャンパスだが、在学中には多摩キャンパスの広さに驚いていた。

学生生活について徹さんは、「当時は学生運動が盛んで、授業ができないことがあって、それが残念でした」と話す。「自分が学生だったころと比べて、今の若い人の考え方はまったく違う。それもいいんだろうけど…」と世代の違いを感じている様子。智さんは、「大学院では、学生よりも社会人の方と接する機会が多かった」と振り返る。中大の良さは、「キャンパスが広くて、環境が良いところ」と二人とも同じ答えが返ってきた。三世代で終わらずに四世代、五世代と続いていくといいですねと言うと、「そうだといいですね」と二

んは、軟式野球部に所属している。梶平さんは小学生までアメリカで生活した。中央大学に入学するきっかけは、帰国子女入試を受けることができたからだそうだ。

「父から学生時代の話をよく聞かされていました。ラグビーサークルの思い出や当時の仲間たちの話など、たくさん聞きました。勉強も大切ですが、大学は一生の友達をつくる場

人とも笑った。(野崎)

☆三世代続くことを、
ちよつと意識☆

矢村繁視さん(昭和32年法学部卒)、弘道さん(昭和55年法学部卒)、望さん(法学部1年)の親子三世は、一代目、繁視さんは働きながら夜間学部に通い、弘道さんが生まれた年に卒業した。二代目、弘道さんは法



矢村弘道さん(右)と望さん

学部に進もうと決めて、いろいろな大学を考えた結果、中大を選んだ。「父と同じ大学ということはあまり意識しなかった」という。

三代目、望さんは、国立公立大学も受かっていたが、「4年間過ごすときにどちらのほうが充実するか考えて中大を選んだ」という。「自分が中大に入学すると三世代続くことも少し意識した」と笑う

弘道さんは多摩キャンパスの1期生で、駿河台キャンパスと多摩キャンパスを2年ずつ過ごした。多摩キャンパスに移ったばかりのころは、「動物園からクジャクが逃げたと連絡があったり、へびに注意という看板が立っていたりしていました」と話してくれた。矢村さんの実家は広島県で、望さんは現在、東京で兄と一緒に暮らしている。離れて暮らす生活のことを話す機会はあ

まりないです」というが、その分、帰省した時は、たつぷり話すことになりそうだ。(野崎)

スポーツトークショー

監督、選手らが『中大スポーツの未来を語る』

開会式終了後、クレセントホール(9号館)では、「中大スポーツの未来を語る」栄光へ向けて」と題して、スポーツトークショーが開かれた。

舞台上に並んだ出演者は、陸上競技部駅伝から浦田春生監督と高橋靖主将、それにOBの上野裕一郎さん(エスビー食品(株)陸上競技部所属)、硬式野球部から高橋善正監督とエースの澤村拓一投手、サッカー部から佐藤健監督と村田翔主将、水泳部から高橋雄介監督と小島涼太郎主将、そして森正明・学友会総務部長の10人。本学OBの吉田墳一郎さん(ラジオ日本エグゼクティブアナウンサー)

(学生記者 伊藤知広)経済学部4年/石川可南子)法学部2年/野崎みゆき)法学部2年)

と、本学OGで元オリンピック水泳選手の田中雅美さん(スポーツキャスター)の司会で行われた。

◆野球部

目標は125周年の日本一

はじめに各部の現状について報告。この中で浦田監督は、「部員数が少ないので、選手が体調を崩したりケガをしたりして、ベストメンバーをそろえることが難しい。どうやって選手層を増やしていくかが課題です」と指摘。監督就任2年目の野球部の高橋監督は、「恩返しだと思っ

第20回 中央大学ホームカミングデー
トークショー 中大スポーツの未来を語る ～栄光へ向けて～



中大スポーツの未来を語るトークショー

というのを目標にしています」と宣言した。

監督の決意について司会者から問われた澤村投手は、「監督が何と言おうとやるのは選手ですから」と答え、会場の笑いを誘った。

サッカー部の佐藤監督は、前日の試合で勝利した駒澤大学戦について、「駒澤のほうが上背があるので、ケンカのような試合でした」と振り返った。

水泳部の高橋監督は、「インカレで12回勝ち、6回負けました。選手たちは6回の負けで苦しみを味わい、絶対勝つという気持ちを持ちました。今年は惜しくも2位でしたが、来年の優勝を誓います」と約束した。

◆水泳部Ⅱ

◆欲しい50m室内プール◆

続いて各選手が、競技生活をおくるうえでの中大の環境について感想を述べた。

現在は実業団で活躍している上野

さんは、「寮生活なので友情が生まれ、競技以外の友達ができました。サポートがとても充実していて楽をさせてもらいました」と振り返った。

駅伝主将の高橋選手は、「初めて（寮に）来たときは留置場かと思いました。でも、それも最初だけで慣れると居心地が良いんです」と寮生活について話した。

野球部の澤村投手は、「良かったことは（高橋）監督と出会ったことです。プロの経験に立って具体的なアドバイスをいただきました」と感謝の気持ちを表した。

サッカー部の村田主将は、「（佐藤監督は）選手に信頼を置いてくれるチームワークはどこにも負けません」と部のまとまりを強調した。

一方、水泳部の小島主将は、「室内プールが25メートルプールしかなく、冬は25メートルでしか練習できません。大会は50メートルプールなので、50メートルの室内プールがあればと思います」と要望した。これ

に関連して、森学友会総務部長は、トレーニングルームがない現状をあげて、「今一番不足している領域」と説明した。

◆ 駅伝 II

指導体制の強化が課題◆

各監督からも現状に対する要望があげられ、浦田監督は、「今は監督一人で指導していて、コーチなどの人数が必要です」と指導体制の強化が課題と指摘。一方、来年3月に完成する陸上競技部の東豊田寮について、「選手を強くすることにつなげていきます」と約束した。

野球部の高橋監督は、「(専用グラウンドではないため)朝練をしているが、そうすると選手の睡眠時間が足りなくなる。夜は(ナイター照明の不備で)ボールが見えなくなるのでナイター練習はできない。勝つためには他大学と同じ土俵に立たなくてはいけない」と練習環境の改善を求めた。

また、司会の吉田さんから、学生時代の田中雅美さんについて問われた水泳部の高橋監督は、「負けず嫌いでわがままでした。でも練習は人の3倍やっていました。そういう個性があり努力をしなければ、勝てません」と答え、会場からは大きな拍手が起こった。

◆ 大学スポーツにもっと関心を◆

学生が大学スポーツの応援に行かない現状についても触れられ、野球

部の高橋監督は、「リーグ戦の試合日程のせいもあるが、学生の応援が少ない。学生が応援に来ない大学野球なんてないですよ」と声を大きくした。司会の田中さんも最後に、「今日のお客さんも少ない。こんなにも(中大スポーツに)興味が無いのかと思います」と述べて、中大スポーツに対する関心の低さを憂え、もっと興味・関心を持って欲しいと訴えた。(学生記者 野崎みゆき II 法学部2年)

山田昌弘教授と 渥美雅子弁護士との対談

『現代家族の絆と リスク〜格差社会を生きる〜』

文学部棟の教室では、昼過ぎから、山田昌弘・文学部教授と渥美雅子弁護士による「ビッグ対談」が、『現代家族の絆とリスク〜格差社会を生きる〜』をテーマに開かれた。

二人の先生は、専門分野が似通っていることから、度々一緒に仕事をすることがあり、互によく知る仲。今回の対談の話が中央大学から舞い込んできた時も、「漫才だったらや

れます、と答えたんですよ」と笑いながら対談はスタートした。

就活で安定志向強まる若者

はじめは、就活問題から始まった。渥美弁護士が、「社会学とは生物である。ころころと変化するものなのです」と前置きすると、すかさず山田教授は、「近頃の若い人には、旅行ガイドブックである地球の歩き方が売れないんですよ。目の前の就活に精一杯で、旅行する余裕がないみたいですよ」と指摘した。

就職しなくてはならないという圧迫感から、就活に直結しにくい旅行などを敬遠する傾向にある、という対談からは、貯金が趣味だという学生が現れたり、公務員志向が強まったりするなど、将来の安定を望む現代の学生気質が浮かび上がってきた。

増える中高年。パラサイト

雇用問題では、非正規雇用が増えて、「ああなったら終わりだ。一度

正規のルートから外れると戻れない」という危機感が広がり、格差社会が拡大している現状が指摘された。

この問題について、山田教授は、「日本は北欧のように、病气、子育て、老後がタダという制度ではない」としたうえで、「誰もがいざという時のために貯金をし、誰かにパラサイトしたいという願望を持って生きて

いる」と解説。親の年金に頼る子供や、中高年のパラサイトシングルが増えており、「日本の雇用や家族を取り巻く現状はますます複雑になるばかりだ」と強調した。

そして二人ともそろって、「金銭的に、各世代は自立しているべき」と主張した。



パラサイトシングルなどについて熱く語る
山田教授と渥美弁護士

自立を覚悟させる子育てを

話は子育て論に移った。親は自分がしたような苦労は子供にさせたくない、過保護になってしまうものだが、渥美弁護士は、「それではない」と自らの子育ての経験を踏まえて力説した。

「親は子供に自立することを覚悟させなければならぬ」と渥美弁護士。「18歳になったら家を出ていきなさい、と言って育てました。大学生になって一人暮らしを始めてからは、彼女もできたみたいでしたよ」と自らの子育てを語った。

コミュニケーションで少子化抑止

山田教授は、対談のテーマに掲げられた家族の絆に触れて、「少子化が最も深刻な問題」であることを挙げた。

平成元年を境にして、夫の収入のみに頼る家庭よりも、夫婦共働きの家庭が増加した、という。つまり専

業主婦が減ったことになる。山田教授は、それにも関わらず、「専業主婦を望む女子学生が増えている」という。「女性は男性にパラサイトして暮らしたいと望み、それが男性が結婚を渋る要因ともなっている」と説明した。

ただ、低収入であっても、魅力のある男性は結婚しているというデータもある、という。魅力ある男性とは、コミュニケーション能力があるらしい。母親や友達との関係を通じてコミュニケーション能力を養う女性に比べ、男性はそのような機会が乏しく、彼女ができたときが、初めてコミュニケーションを学ぶ大きな機会になるという。

「コミュニケーションを通じて、家族と向き合うこと。これが家族の絆を取り戻し、少子化を食い止めるための一つの解決策になる」と二人は締めくくった。

（学生記者 石川可南子Ⅱ法学部2年）